最後の歌詞

創成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の歌詞

【Nコード】

N6926E

【作者名】

創成

【あらすじ】

変えたい物が変わらないことだつてあるし、変わつてほしくない事が変わってしまう事もある。気持ちは変わるもんなんだよ。でも、ある人の気持ちだけは繋ぎ止めたいなんて贅沢な願いかなあ？

最初に読んでほしいラスト

今ある全ての物が当たり前なんかじゃなく、

今ある全ての物が奇跡的にあるとしたら、

君はどうやってそれを守るだろう。

遅すぎないうちに、まだ間に合う今のうちに、
守るための精一杯の事をしよう。

生まれてくれたお礼に。

2. 「自覚の手前」

「キーンコーンカーンコーン」

授業終了のチャイムが鳴った。

チャイムを合図に俺は起きる。

あとはホームルームが終われば帰れ……

「水希〜！今日はちゃんと仕事してってよね！」

……でた。

俺に話しかけてきたのは「サイトウ斎藤 ヒトミ瞳」。

幼馴染の女子だ。

「あんたが来ないとあたしまで怒られるんだからね！」

「はいはい」

そんな会話をしていると、担任が教室に入ってきた。

「ほら〜そのW斎藤。席に着け」

「はい」

「はいはい」

テキストに返事をして座る。

「プリント配るぞ」

担任がプリントを配る。

……何だ？これ。

「秋のキャンプ」だって。

「水希、行かない？」

行かねーよ。誰が行くか、こんなもん。

「考えとく」

瞳に返事をしてプリントをしまう。

「よし。じゃ、ホームルームは終わりだ」

やっと終わった〜。

うし、帰るか。

「水希〜！また逃げる気でしょ〜！」

「違う違う。トイレ行ってくるだけだつて。」

「ホント？ならいいけど……早くね」

「あいさ〜」

よし。逃亡完了。

瞳はとてつもなくだまされやすい。

だから嘘も簡単に信じる。

さて、帰って寝よ。

俺は学校をでた。

そこには心配事なんて、まだ一つもなかった。

「恋してる」なんて自覚なかったし、

瞳の気持ちも知らなかった。

自覚したら瞳と普通に過ごせなくなりそうで。

自分から逃げ出していた。

3 . 「今弾ける曲」

家についた俺は、ギターを弾いていた。
今、唯一弾ける曲。

曲名は忘れた。

父さんから教えてもらった曲。

歌詞は耳コピで覚えている。

家の中は誰もいなくて静かだ。

母さんは仕事に行っている。

父さんが事故で死んでから、母さんはずっと仕事をしている。

いつも忙しそうに……

「ただいま」

瞳が帰ってきた。

「水希！またサボったでしょ！」

「なんの事だよ」

「掃除よ！そ・う・じ！」

「俺を信じたお前が悪い」

「なによ！水希が嘘ついてるなんてわかってるもん！」

「じゃあ逃がさなきゃいいじゃん。つか待つなよな」

「ふんだ！水希はどうせ面倒くさい事があると逃げ出すんでしょ！」

「わかってんなら待つてなくていいんだよ。俺待つてる暇あったら早

く帰ってこい」

「だって、もし水希が帰ってきたら困るでしょ？」

「……お前、ホント悪役向いてねーよ。」

子供の喧嘩みたいに叫んでくる瞳。

「愛しい」なんて思っでないけど、

なくしたら困るものだと思う。

今はまだ、自覚する勇氣なんてないけど、

しなきゃいけない。

そんな時は……瞳に告る。

でも、それまでは普通に過ごしていたい。

決心がついたら、瞳に曲を聴かせよう。

少しハズいけどラブソングを。

でも、それは瞳の気持ちを知ることの意味する。

俺でさえ怖いもんな。

瞳も怖いだろう。

気持ちを伝えるのは。

まだ「愛」とか「恋」とかよくわかんないけど。

それでもやらなきゃなんない事がある。

4 . 「笑うために」

家族構成を紹介しようか。
気が向いたから。

俺と母さんはいいだろう。

今、俺と瞳は同棲している。

同棲と言っても、俺と瞳と母さんの3人暮らした。

父さんは、病で死んだ。

急性の病気だったらしい。病名は長くて忘れた。

瞳は捨て子だ。

なんでも、孤児院から父さんが引き取ってきたらしい。

しかし、その父さんも死に、3人となった。

・・・そんなもんかな。

「まったく、毎回待っててあげてんのに〜!!なんで毎回来ないの
〜!!」

瞳の怒りはまだ続いている。

「わかつたわかつた。今度は行くから」

「ホント?絶対?」

「絶対行く。行かなかつたらお前の言うこと聞いてやるよ」

「ホント?約束だよ!」

そう言つて小指を出す瞳。

「・・・何だよ。これ」

「指きりに決まってるでしょ!早く!」

「・・・ほら」

「ゆ〜びきりげ〜んま〜ん」

大声で歌いだす。

精神年齢幼すぎだろ。コイツ。

「約束したからね！守ってよ！」
「はいはい」

にしても……行かなかつたらコイツ何言う気だ？
なんか……やな予感するな……
コイツに本気で付き合つと体力がもたない。
こりゃあ……サボんない方がいいな。うん。

「ただいま」

そんな事をしてると母さんが帰ってきた。

「おかえりなさ〜い！」

瞳が走つていく。

まるで主人を待っていた飼い犬のように。

それもそのはず。母さんに買い物をお願いしていたようだ。

「はい。これ」

「おばさま、ありがとうございます！」

なんかキヤラ変わってね？

なんだあの天然清楚キヤラは。

走つて俺の部屋に戻ってくる。

「水希！おばさまがメロンパン買ってきてくれたよ！」

……そこまで喜ぶことなのか？それ。

「食べる？」

「いらねえ」

「じゃあ絶つつつつ対あげないからね〜！」

「いいよ。別に」

「……ホントに？いらないの？」

「いらねえよ」

しつこく聞かれ溜息気味に言う。

「……水希のバカ！」

いきなり怒つて部屋を出ていく。

俺、何かしたか？

「水希。ちよつと」

母さんが呼んでいる。

「何？」

「これ、瞳ちゃんのところを持ってって」

「何で俺が・・・」

「水希。女の子をいじめちゃダメよ」

「は？何それ」

「それは自分で考えなさい」

よくわかんねえ。

わかんねえんだけど・・・

なんか頭の中にモヤモヤがあって・・・

わかんねえ。

もう考えんのはヤメだ。

アイツ相手に考えたってムダだ。

簡単に動こう。

アイツを笑わせる。

それだけで俺も笑えるんだから。

5 . 「太陽の笑顔」

「ふう……」

静かに息を吐く。

大袈裟だが、覚悟を決めた。

とりあえず、謝る。

で、笑わせる。

それだけだ。

……難しいよな……

ま、やるっきゃないか。

ハンバヤけくそで瞳の部屋をノックする。

「瞳？母さんから……」

ドアを開けると、暗い室内。

そして部屋の隅に体育座りでいる瞳。

「瞳！」

走って駆け寄る。

「ひつく……ひつく……」

しゃっくりをしながら俺を見上げる。

「ひつく……う……うわああああん！！」

大声で泣き始める。

「ごめん、瞳」

強く瞳を抱きしめる。

「うわあああん！」

泣きやまない。

「ごめん」

「うあああああ……ひつく……ひつく……」

だいぶ落ち着いてきたようだ。

「水希……ひつく……もう……あんな顔……ひつく……

しないだね……」

「うん。しない。約束するよ」

こいつが泣く位だ。

酷い顔してたんだろうな。

「瞳……」

「……ひつく……何?……」

「もう、あんな顔しないから……笑って……」

「……笑ったら嬉しい?」

「嬉しいとかじゃなくて……ん……ハズいけど、俺は瞳が笑ってないと笑えないんだよ……」

「……ホントに?」

「うん。だから、笑って」

「……うん。分かった。あたし笑ってるよ。太陽みたく」

太陽……か。

じゃあ、俺はお前にとって何になれるんだろ……

「その代り……水希は月みたく綺麗に光ってね?」

……月?

あの月?

そうか。月か。

お前の闇を照らしてやれるなら悪くないかもしれない。

「いいよ。月にもなんでもなってる」

そっと瞳から離れる。

本題に入る。

「これ、母さんから」

瞳に袋をわたす。

中身は知らない。

「えっ?何?」

袋を開ける瞳。

「……C……D?」

袋からは一枚のCD。

何の唄だろ?か?

「水希。聞こ？」

瞳はコンポを持っていない。

だから俺の部屋に聞きにくる。

「ああ」

正直、俺も気になっていた。

そのCDに。

どこかで記憶が引っ掛かっていた。

6 . 「記憶の唄」

CDを持って俺の部屋に向かいながら、
あることに気がついた。

なんで母さん、CDなんか瞳に？

俺の部屋で聞くのは母さんもわかってんのに……..
ま、聞けばわかるか。

それより、これが何のCDか、だ。

裏を見る限り、どうやらシングルのようだ。

「right……」。

そこからは擦れて読めない。

曲名は……..

「ブツ！」

思わずふきだした。

「どしたの？水希」

「いつ、いや！何でも……..」

「変な水希」

クスクス笑いながら進む。

そりゃあ驚くさ。

曲名も擦れて読めないけど、

最後に「ラブソング」なんだから。

母さん……..苛めか？

そうしているうちに部屋についた。

ココまで来たら聞くしかないだろ……..

「水希、かけていい？」

「あつ、ああ……..」

コンポの電源を入れる。

曲が流れだす……..

……..

知っている唄だった。

知っているどころか、俺がいつも唄っている唄だった。

そうか。父さんが好きだった曲……

瞳を見る。

「……………」

目を瞑って、静かに聞いている。

「綺麗だ」。

素直にそう思った。

さっきまでとのギャップに驚く。

ふと、曲名を思い出した。

忘れられていた名前。

「自分勝手なラブソング」だ。

曲が終わる……………」

「……………水希……………」

「ん？どした？」

「もし、さ。水希があたしの事……………やっぱり何でもない」

俺はわかっていた。

瞳が何を言いたかったのかを。

だから……………」

「いいよ」

「えっ？」

「唄ってやるよ。この唄を」

「……………うん！」

素直に喜ぶ。

自分で決めて、自分でやって、自分で満足する。

そんな事ない？

俺がアイツを守るのは、正にそれだ。

誰かに頼まれたとか、アイツが望んだとか。

そんなんじゃないって、

俺がアイツの泣き顔をみたくないだけなんだ。

俺がいなくなる前に、アイツに何をしてやれるだろうか。

7・「気疲れの寝言」

「ピピピピピピピピピピピ」

目覚ましの電子音が聞こえる。

「パシッ」

止める音。

「そろそろかな……」

小さく独り言を言う。

「ガチャッ」

ドアが開く。

「おはよう水希」

「はよ」

「コーヒー、飲む？」

「うん……」

元気がない瞳。

なんか変な感じがする。

瞳を泣かせた日から3日がたった。

あの日から俺達はギクシャクしている。

そりゃそうだ。

「太陽みたく」とか「月みたく」とか。

そんなこと言っただけで普通にいられるわけがない。

でも……そこまで緊張されたら俺もつられるって。

コーヒーをいれる。

「バタッ」

何か音が聞こえた。

「瞳、砂糖……」

「瞳!」

瞳が倒れている。

「大丈夫か？」

気を失ってるようだ。

「バカ……」

瞳に向かって小さくそう言った。

ベッドに瞳をはこんで寝かせる。

気疲れ……かな。

こここのところ、ずっと元気なかったからな……

「み……き……」

瞳が寝言を言ってる。

「プツ」

寝言なんて言うんだな。

軽く笑ってそう思う。

寝言を聞いてみる。

「水希……」

「ん？」

あれ？

寝言に返事しちゃダメなんだっけ？

「……バカ……」

……。

おいコラ。

寝言だとしても今のは聞き捨てなんねーぞ。

「……ウソ……」

何だよ、ウソか。

「……」

「ツツ！」

赤面する。

なんて言ったか？

ぜってー教えない！！

8 ・ 「反則のお礼」 (前書き)

もともとこの小説は早めに終わらせる予定だったのですが、結構長引きそうという進行状況。

大して(全然)面白くありませんが、読んでくださっている方々。どうか気長にお待ちください。

でわでわ皆さん、いい夢を。

8 「反則のお礼」

「ふつふつふつふつ……」
沸騰している音がする。

「カチャン」

火を止める。

「熱っ！」

盛りつけに失敗する。

何してるかって？

瞳の為にお粥作ってたんだよ。

「ふ〜……」

何とか作り終えた。

「さてと……」

瞳のところへ持っていく。

「……あ」

「ん？」

階段の途中で声が聞こえる。

瞳か？

「……きつとずっと、待った奇跡よ、起るなら今」
聞いたことがない曲だった。

瞳が歌うなんて珍しい。

そのせいか、思わず聞き入った。

歌詞から察するにラブソングかな？

ん？ラブソングって言えば……

ついさつき、俺、瞳に……

だーっ！

なんでもねえよ！

何も言われてない！

よし！

行こう！

自然に自然に！

はい深呼吸！

「スーハースツ「水希？」！？」

「ゲホゲホ！」

いきなり出てくんない！

せっかく落ち着こうと……

「何？それ」

「えっ？あつ、おっお粥だよ」

「……水希が作ったの？」

「お、おう……」

「ふーん……」

「と、とりあえず部屋で食べよ。居てやるから
瞳を部屋に入れさせる。」

「いただきます……」

「……何か緊張するな……」

「パクツ」

「……」

「……おいしい！」

「……マジで？良かった〜！」

「うん、おいしいよ？水希意外に料理できるんだね」

「「意外」は余計だっつーの！」

「あはははは！褒めてるんだよ？」

「いやいや、それは褒め言葉じゃないだろ！」

「そうかなあ……でも、ありがとね！水希！」

ドキッ！

「お……おう！」

待て待て待て待て！

今のは反則だろ！

笑顔で「ありがとう」はないって！

無理！死ぬ！心臓破裂する！

「水希？どうしたの？」

「あっ？・・・なっ、何でもないよ！あっ、洗い物してくる！」

「えっ？ちよっ・・・もう、居てくれるって言ったのに・・・」

「」

「ダダダダダダン」

階段を走って降りる。

「ハーツ！死ぬところだった！」

一人で叫んだ。

新ルール 笑顔で「ありがとう」は禁止！

「そつか・・・わかった」

「んじゃ、気をつけるよ？」

「大丈夫だって！」

「じゃ、な」

瞳には・・・自由でいてほしい。

俺なんかよりずっといい奴がいるさ。

それから俺は瞳を避けた。

俺に対しての気持ちを強くされても困る。

それに、俺も気持ちを冷まさなきゃならない。

でも、離れば離れるほど近くにいたくなつた。

俺ってこんなに独占欲強かつたっけ？

それでも離れて、「これも瞳の為だ」って言い聞かせた。

瞳の気持ちも知らずに・・・

卒業式前日・・・

留学することを母さんに伝えた。

旅費や生活費は自分で何とかすることや、

瞳には言つな、という事も含めて。

母さんは静かに泣いた。

「何でも事後報告なんだから・・・」

と愚痴を言い、最後に「おめでとう」と言われた。

ありがとう、母さん。

こんな俺のわがママを認めてくれてありがとう。

母さんが泣きやんでから、俺は出発の日取りを言った。

「卒業式の次の日・・・2日後に行く」

卒業式当日。

卒業式も終わり、そろそろお開きかと思ったとき、瞳に呼ばれた。

「水希！」

「・・・何？」

息が荒い。走ってきたからか？

「留学・・・するってホント？」

「お前・・・それ誰から・・・」

「おばさん・・・そんな事どうでもいい！留学ってどう言っ事？何で？」

「・・・俺がしたいからするんだよ」

「・・・」

「ぐっ」

「え？」

一瞬混乱する。

瞳に引っ張っていかれる。

「こっち来て」

すたすた歩く瞳。

「どうして言ってくれなかったの？」

「・・・好きだからだよ」

「え？」

「好きだから、離れられなくなるから」

「水希・・・」

そして小さくありがとう、と呟く。

「水希、約束したよね？」

「？何をだ？」

「あたしの事好きになったらあの唄、歌ってくれるって」

「・・・ああ、いいよ」

.....

伝えたい言葉はこんな唄一曲に収まらないけど、それでもいい。瞳が俺の事を想ってくれるだけで、いつだって強くなれるから。

自信なんてないけど、誰かに認めてほしいわけじゃないんだからそれでもいいぞ。
初めてそう思えたよ。

10 . 「最後の歌詞」

それから、瞳は泣いた。

それ以上泣いたら死ぬぞ、って言っても泣いた。

そして出発当日。

「じゃあ、行ってくるよ」

「気をつけてね」

「うん……」

見送りに瞳は来てなかった。

あえて俺はそれには触れず、母さんとだけ会話を交わした。

「じゃ、飛行機来たから……」

「いつてらっしやい」

笑顔で言う母さんに俺は、

「行ってきます」って返した。

ゲート前。

「水希！」

「……何？」

何かデジャヴ。

「これ……」

「？手紙？」

「飛行機で見て」

「……わかった。じゃな」

「……水希！」

「何だよ……」

瞳はまた泣いていた。

「泣くなって。最後の最後にその顔か？」

おどけて見せるが泣きやまない。

あまりに泣きやまないから……

「瞳、ちよつと来い」

「?……」

キスをした。

「もう泣くなよ?」

「……わかった。もう泣かない」

「……よし!」

「じゃ、行ってきます」

俺の言葉に瞳は笑顔で

「行ってらっしゃい!」

って言ってくれた。

飛行機内……

そう言えばさつきの手紙……

ポケットから取り出して中身を見る。

水希へ

水希、ありがとう。

こないだの唄、すごく嬉しかった。

あだし、泣き始めると全然泣きやまないから、あのときは頑張って我慢したんだよ?

今まで水希と過ごした日々は、ホントに月みたく綺麗に残ってるよ。

永遠の別れじゃないけど、絶対忘れないよ。

水希はいつからか分かんないけど、

あたしはずつつつと前から好きだったよ。

もしかしたら始めて会ったときからかもしれない。

だって水希、優しいから。

多分こんな事、言葉にはできないよ。

こんな事口にしたら、恥ずかしくて死んじゃいそう。

水希が留学するって聞いた時、あたしは気付いたら走り出してた。水希の気持ちを訊きたくて。

水希が困るようなことばっか書いてあるけど、消したりしないよ。水希には、知っておいてほしいから。

あの日、水希からもらった唄を、忘れないようにここに記すよ。

「自分勝手なラブソング」

自由でいてほしいけど、僕のこと見ていてほしい。

キミの笑顔が見たいけど、他の奴には見せたくない。

こんな事言ったら、キミは困った笑顔になるんだろうな。

この星には60億人の人がいて、その半分が女の子で。

てことはキミは、30億分の1で。

でも、僕はキミの事30億分の1だなんて考えてないよ。

何億分の1だろうが、キミはキミで。

僕がキミに出来ることは全然無いけど、キミから教わったことは覚えてるよ。

キミから教わったことだけど、もう一度キミに贈ろう。

僕とキミで忘れないように。

キミから教わったこと。

そのまま言っよ。

10 . 「最後の歌詞」(後書き)

最終話です！

特にこれと言って面白い所は無かったのですが、自己満足で書ききりました。

執筆中は自分の書いた文にやける始末…

さてさて、のんびり次回作でも考えましようか。
それでは皆さん、良い夢を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6926e/>

最後の歌詞

2010年10月28日08時02分発行